

紹介

ロビン・オズボン著（佐藤昇訳）

『ギリシアの古代』

——歴史はどのように創られるか？——

本書は、Robin Osborne, *Greek History, Classical Foundations Series*, London, 2004の邦訳である。著者のオズボンは、ケンブリッジ大学古代史教授として英国古代史学界を牽引する古代ギリシア史研究者であり、学生および一般読者を対象として書かれた本書には、彼の研究成果と広範な知識が凝縮されている。

本文は全八章から成り、まず第一章「馴染み深く、異質なギリシア」では、陶器画や有名な彫刻デイスコボロスが扱われる。古代ギリシアのスボーツが同性愛や宗教的な祝祭と密接に結びついていたことを示しつつ、著者は、現代の西洋社会にとって「馴染み深い」ギリシアが、実は「異質な世界であったことに注意を喚起する。

続く第二章「ポリスを創る」では、同時代史料の少ない前古典期に行われた植民活

動を取り上げ、考古資料や後世の文献史料を用いる際の問題点について考察する。ここでは、時代や書き手によって関心の対象

が変化するという文献史料の性格に加え、その文献史料の影響下に置かれているという考古学の性格もまた、史資料の解釈を困難にしていると述べられ、歴史は「創られる」ものであるということが確認される。

こうした解釈の難しさにもかかわらず、文献史料だけでは知ることのできない情報を提供するものとして、考古学の有用性を示すのが、第三章「ギリシアの人口とサヴァイヴァル」である。著者は、古代経済を自給自足的なものとするフィンリー説の問題点を指摘し、考古学、比較人口学、地中海農業や栄養素に関する知識に基づいて、むしろ都市間の大規模海上交易が発展していた可能性すらあると主張する。

第四章「法、僭主、そして政治の創造」では、僭主の台頭を市民団の武装と結び付けて説明する旧説が否定され、共同体が、時に法を制定し、時に支配を僭主に委ねることで紛争解決を目指した様子が示される。前古典期にギリシア各地で制定された法が、実定法ではなく、個々の事例に照らして解

釈されるものであったという指摘は、特に重要である。

第五章「敵対する」では、共同体外部との関係、とりわけ戦争が考察の対象となる。ここでは、前古典期の戦争が、後世に象徴として利用されていたこと、農民が軍事を担っていたために、古代ギリシアでは平地での短期決戦が好まれたことなどが示される。さらに、前五世紀に入ると、隣国間の小規模な紛争であった従来戦争が変質し、その背景には、ペルシアとの緊張関係、さらにはアテナイの帝国化があったと論じられる。

第六章「自由と抑圧の都市」で取り上げられるのは、まさにこの時代のアテナイである。古典期アテナイでは「自由」を実現するための制度が整備されていたが、それ以上に大きな役割を果たしていたのが、「自由」と表裏一体の関係にある「抑圧」であると著者は強調する。さらに、「抑圧」には、「市民団はすべて同質である」というフィクションを設定する自己抑圧と、奴隷、在留外国人、女性などの他者への抑圧が含まれるということが述べられる。

第七章「ギリシア都市、斉一性と多様

性」では、古代ギリシア世界を構成していた大小様々な都市に目が向けられる。政治システムや宗教儀礼などに相違点が見出される一方で、これらの都市は、体制や法にかかわる基本的な枠組みを共有していたとされ、とりわけ戦時の宣誓順守や遺体埋葬は、宗教的責務ともみなされる重要な慣習であったことが、ここで示される。

最後に第八章「アレクサンドロス―ギリシア史終幕?」では、ペロポネソス戦争終結直後からアレクサンドロスの死までが概観され、マケドニアの支配によってギリシア世界の独立自治の時代は終わるものの、ヘレニズム時代と古典期の間には一定の継続性が見られることが指摘される。また、フィリッポスやアレクサンドロスが台頭した前四世紀には「傑物が活躍するための歴史的な環境が作り出されていた」として、ペルシア戦争とペロポネソス戦争という二つの戦争による社会の変化についても論じられる。

著者は、文献史料や考古資料に基づいた豊富な具体例を挙げ、関連する諸分野についての知識や興味深いエピソードを適宜紹介すると同時に、歴史が「創られる」過程

を丁寧に描き出す。古代ギリシアの歴史を構築していく上で基礎となる考え方が提示されている点は、本書の特長であり魅力でもある。場合によっては、このような詳細な記述が挿入されることで、議論の本筋や年代の順序が追いつらなくなっているものの、訳者の佐藤昇氏によつて章ごとに設けられた解説文や訳注は、これを上手く補っている。また、巻末の読書案内は、邦語文献が加えられたことにより、さらに充実したものとなっている。本書は古代ギリシア史研究の入門書として、非常に有益な一冊であると言えるであろう。

(四六版 二六一+Ⅷ頁 二〇一一年七月)

刀水書房 税別二八〇〇円)

(杉本陽彦子 京都大学大学院文学研究科修士課程)

藤井讓治編

『織豊期主要人物居所集成』

織田・豊臣政権期の研究は、少なからぬ部分を書状などの無年号文書に依拠して進められている。当該期はめまぐるしく政治状況が変化する時代であり、無年号文書の正確な年次比定が求められる。その確定作業においては、古記録などの同時代史料により発給者・受給者等の居所や行動を調査する作業が不可欠である。

本書はこのような織豊期の研究をする上で非常に有益な研究成果である。編者の藤井讓治氏をはじめ、堀新氏、藤田恒春氏、相田文三氏、早島大祐氏、尾下成敏氏、中野等氏、穴井綾香氏、福田千鶴氏、松澤克行氏、柿田善雄氏により分担・執筆され、織田信長(堀)、豊臣秀吉(堀・藤井)、豊臣秀次(藤田)、徳川家康(相田)、足利義昭(早島)、柴田勝家(尾下)、丹羽長秀(尾下)、明智光秀(早島)、細川藤孝(早島)、前田利家(尾下)、毛利輝元(中野・穴井)、小早川隆景(中野)、上杉景勝(尾下)、伊達政宗(福田)、石田三成(中野)、